

リハビリテーション部臨床心理室

主任 和田 寿美

はじめに

リハビリテーション部臨床心理室は、常勤の2名体制でした。回復期リハビリテーション病棟の病棟4フロアの入院患者と、外来患者を対象としています。2019年5月から始まった、高知県委託の事業である高知県高次脳機能障害支援拠点センター青い空への0.5人出向も継続しています。

ところが、1名が急遽9月末～11月末まで休職となりました。期間限定であったため補充等は全く検討せず、残る1名での対応としましたが、業務量の限界があり関係各所には迷惑をかけることとなりました。職員が健康で業務に従事できること、その基盤があつてこそ、質の充実に転換できるのだと改めて思いました。

実績について

○近森リハビリテーション病院)

図1には、入院及び外来の新規患者数を示します。1年間を通して、新規介入した入院患者は31名(前年比69%)、外来は23名(前年比51%)でした。入院は、前年比約7割ということで減少傾向ですが、業務量調整への配慮の結果と思われる。外来は、全体的な縮小傾向にあるのと、曜日による患者数の差が影響したと考えられます。

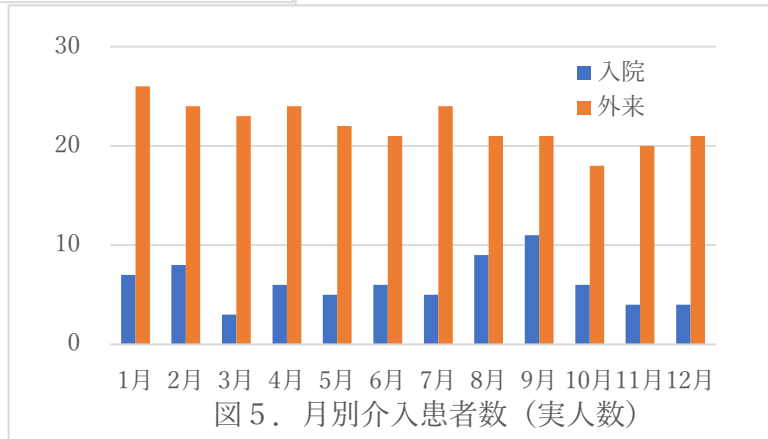
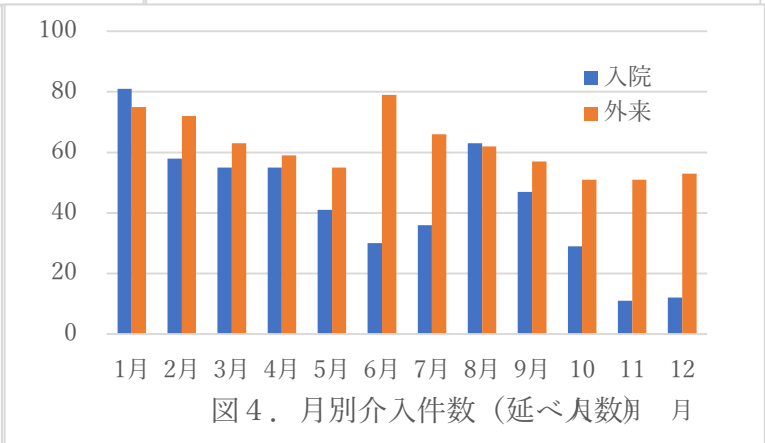
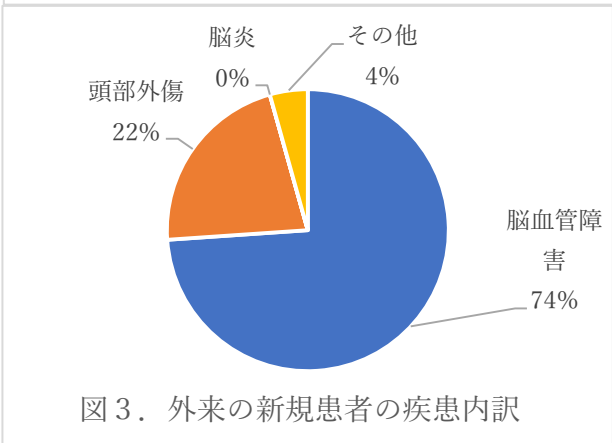
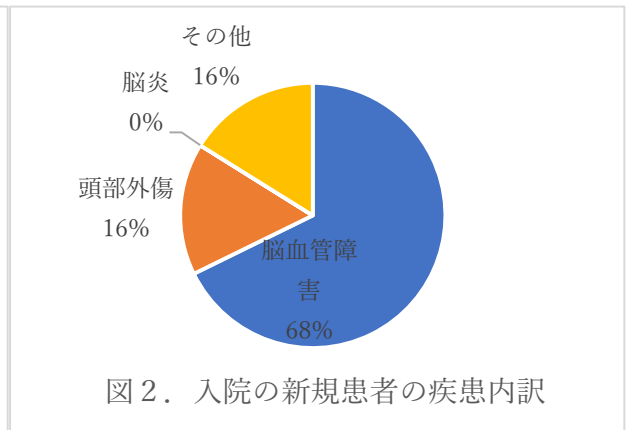
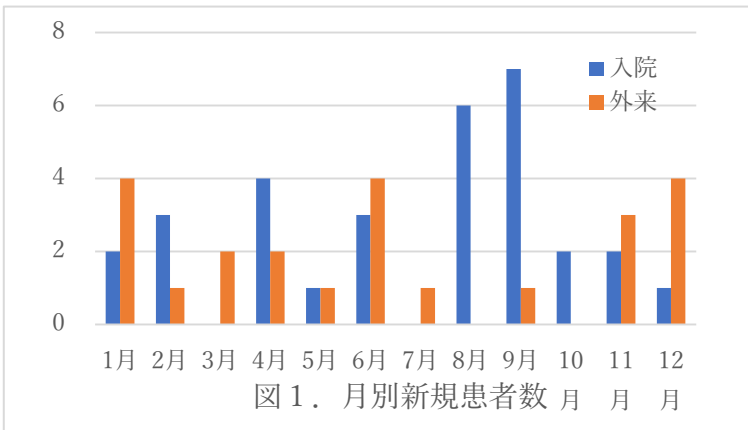
図2で入院での新規患者の疾患内訳を、図3で外来での新規患者の疾患内訳を示します。前年に比べて、外来では頭部外傷の割合が減り、脳血管障害の割合が増えました。入院では、その他の疾患の割合が増えていますが、脊髄損傷などの外傷患者でした。既往として脳血管障害がある方でしたが、入院中だからこそ脳損傷(脳血管障害、頭部外傷、脳炎等)以外の患者への心理的介入も可能といえます。

図4では月別での入院・外来における介入件数の推移を、図5では月別の入院・外来における介入の実人数を示します。対象者数が減少傾向にあるのですが、その分入院では、対象患者1人当たり介入できる頻度を上げることができています。但し、それもフロアによって差が出ているのが課題であり、業務量や介入方法など今後の検討課題です。外来では、のべ件数も実人数も月による差は少なく、比較的安定した推移でした。以前は、その時々患者層によってグループ訓練を行っていましたが、感染防止として実施を避けている状況があります。高次脳機能障害の病識獲得には有効な手段のひとつであるため、実施のためにできる工夫も検討します。

神経心理学的検査及び心理検査は、高次脳機能障害の診断の補助だけでなく、精神障害者尾保健福祉手帳や精神障害年金の申請、自動車運転再開の可否についても活用される重要な情報のひとつです。実施とその結果だけでなく、内容を分析及び解釈し、それらを患者、家族、多職種チームに理解しやすいように伝えることまでが重要です。

大事にしたいのは、障害だけでなく患者全体をみること。また患者を取り巻く家族ら環境にも目を向けて、患者の過去から現在を理解しながら未来への見通しを一緒に考えていけるよう、知識だけでなく技術や経験を磨き、患者、家族、多職種からの信頼を得て、患者、家族の回復を支えていきます。

入院と外来でのそれぞれの機能から、提供できるサービスの工夫と、質の向上を図り、業務量の適正化などにも合わせて取り組んでいきたいと考えます。



○高知県高次脳機能障害支援拠点センター

高次脳機能障害支援拠点センター青い空では、高知県内の高次脳機能障害に関する相談支援と普及啓発事業に取り組んでいます。スタッフは、支援コーディネーター1名（プラス2名の兼務）、心理士0.5名という体制です。

相談支援では、主に電話での対応でした。本来、訪問や来所にて顔が見える支援が望ましいと考えていますが、2020年は互いの安全を守るために、担当者会なども参加者を絞り、集まる機会を極力減らしました。家族教室は開催にこぎつけましたが、やはり後半は中止となりました。不全感はあるものの、継続した支援の必要を痛感しています。

地域研修会では講師役を務めさせていただきましたが、初めてのオンライン開催で、対面との違いに戸惑いました。一方、県の事業ではありませんが、リハビリテーション講習会（損保協会主催）の事務局も担い、シンポジストのひとりとして参加しましたが、高次脳機能障害に関する日頃の思いを、当事者や家族の代表者と共に発表する機会は大変貴重なものでした。

「高次脳機能障害はよくわからない」との声をよく聞きますが、症状の現れ方や困り感など、個人差が大きいことによります。一般社会ではまだまだ認知度が低く、それゆえ当事者や家族だけで抱えこんで経過したという相談者にも出会います。発症や受傷から地域生活まで支援が途切れないことが望ましいですが、どうしても途切れてしまった場合、当センターへの相談によって改めてつなぎ直しができるのであれば良いのだと思います。誰でも高次脳機能障害を抱える可能

性を持っています。正しい知識を持ち、今の当事者や家族への理解や支援を進めて、住みやすい社会を作っていくことが、未来の安心にもつながると考えます。

まとめ

心理的支援を必要とする目の前の当事者（患者）、家族を支えることが、心理士の役割です。まず当事者（患者）に寄り添い、自身と向き合うことを支え、家族や社会との折り合い点を探し、環境調整（物理的環境や人的環境）を図り、適応を促すことです。場合によっては、直接的介入よりも、当事者（患者）が信頼する他者（家族、支援者、他）を支えることが、結果患者や家族への有効な支援となることもあります。

変動する社会情勢の中で、ステレオタイプでなく柔軟な対応力は更に必要とされるのだと思います。これまでに振り返って検証しながら、今後は戦略的（計画的）に取り組んでいきたいと考えます。